

## ラジオ番組「少国民の時間」による戦争協力

中 村 美和子\*

### The War Effort Through the Radio Program “Shokokumin no Jikan” (Hours for the Rising Generation)

NAKAMURA Miwako

#### Abstract

This study clarifies how the children’s radio program “Shokokumin no Jikan” (Hours for the Rising Generation) in the Showa period promoted the war effort in line with national policy. The historical materials in this investigation are program textbook issues from May 1941 to May 1942 and eight scripts of radio dramas for children produced between July 1941 and July 1945.

Investigation of these materials found the following. First, from January 1941, the time of its predecessor, “Kodomo no Jikan,” “Shokokumin no Jikan” produced programs in line with the new government regime, and the hours for children’s entertainment “Kodomo no Jikan” had shifted to hours for governmental propaganda. Second, although the last issue of “Radio Shokokumin,” the program textbook of “Shokokumin no Jikan,” was unclear in preceding studies, the May 1942 issue was confirmed as the last. Third, while the two scripts from the first half of “Shokokumin no Jikan” depicted children’s lives based on home and school, the six scripts produced from October 1944 to July 1945 depicted their lives away from their parents in evacuation centers or bases for children’s production activities, showing that even children were expected to devote their lifetime and spirit to total war.

Keywords : war effort, radio, “Shokokumin no Jikan” (Hours for the Rising Generation), propaganda, script

#### 1. はじめに

2025年、日本の放送事業は開始から100年の節目をむかえる。1925年3月22日からの東京放送局（JOAK）による仮放送を経た同年7月12日がラジオの本放送開始日で、1951年9月1日に民間放送が開局するまで日本放送協会は国内唯一の放送事業者であった<sup>1</sup>。放送は今日まで業界の拡大とともにテレビや衛星放送の開発、電波のデジタル化など、たゆまない技術開発を基盤に展開され、人びとのくらしに多様な情報を提供し、番組受容者の嗜好やニーズに配慮した娯楽・教養の機会、他者の生活の疑似体験などをもたらしてきた。

放送の歴史のなかで、子ども向けの番組はごく初期から提供された。放送記録のデータベース『NHK確定番組』では、JOAKの仮放送時代に童謡独唱、お伽講演、童話などの番組が散見される<sup>2</sup>。愛宕山のJOAK新局舎から本放送が開始された1925年7月12日には、口演童話家で早蕨幼稚園長の久留島武彦<sup>3</sup>が童話を語った。番組記録

---

キーワード：戦争協力、ラジオ、「少国民の時間」、プロパガンダ、台本

\*令和2年度 人間発達科学専攻修了 基幹研究院研究員

には「子供の時間」と添え書きがある<sup>4</sup>。当初、娯楽・慰安とされた子ども番組は次第に教養が意識され、1933年からは学校教育を補助する学校放送が加わり、子どもの発達への効果がいっそう検討されながら発展した<sup>5</sup>。だが、子ども番組の放送史は全容が解きほぐされていないわけではない。

戦前・戦時下のラジオ番組の録音は残されておらず、紙媒体の史料は処分され、あるいは発掘されていないために評価や反省がじゅうぶんでない部分もある。そのような条件であっても、総力戦体制下での一般向け放送の戦争協力に関する研究には着実な成果があがっている<sup>6</sup>。本研究はその流れにくみし、蓄積がまだ僅少な子ども番組を検討する。番組にどのような戦時協力をうながす働きかけがあり、それによって子どもの生活や精神、日々の楽しみや遊びまでもがどう動員されようとしたのか、その一端の解明に目的を置く。

1941年4月、国民学校制度の実施により教育が本格的な戦時体制に入ると、連夜6時の時報につづき帰宅後の子どもたちのためにラジオで放送されていた教養番組「子供の時間」の名称は「少国民の時間」に変更された<sup>7</sup>。国民学校は皇国民の錬成を主眼としたため、国民学校制度の施行規則により正規の教材と認可された国民学校放送のほうは、その趣意に沿う運営を文部省の指導下でもとめられた。いっぽう、夕方放送の「少国民の時間」もすでに前身の「子供の時間」の時代から「課外読本的」<sup>8</sup>な役割としての教養番組と放送局で位置づけられ、娯楽色が薄まる傾向にあった。「少国民の時間」は終戦を経て放送がつづけられ、1945年12月1日に「伸よレクラブ」と改称された<sup>9</sup>。1945年4月以降は全校式のラジオ受信機用の真空管不足から国民学校放送は休止され<sup>10</sup>、そこから5、6分程度の読方練習、算盤練習、理科教室、字号訓練などの放送種目が移されて編成された<sup>11</sup>。

「少国民の時間」は子どものほか、お茶の間にいた家族の聴取も考えられる。番組枠は日曜祝日の午前中にもあった。大人をふくめた国民への働きかけが可能な時間帯の番組で、時局にふさわしい「課外読本的」な役割とはどのようなものであったのか。番組の月刊テキストで「少国民の時間」制作の方向性をさぐり、現存する台本で具体的内容をみていく。

ラジオの子ども番組による戦時協力をあつかった研究には、国民学校放送の国民科国史用に1941年4月から放送された国史劇シリーズについて、企画経緯と放送台本の表現を検討した中村美和子の研究がある<sup>12</sup>。同シリーズは正規の教材にみとめられた学校放送枠内の番組で、中村の研究では、大衆的な人気作家・額田六福が文部省の徹底した指導のもと国策として子どもをみちびく教育にいかんか尽力したかが実証された。このほかに子どもの動員という視角からとらえられる先行研究として、1942年11月7日に日本少国民文化協会・日本放送協会主催で開催された「全国少国民ミンナウタへ大会」を取りあげた葉口英子、浅岡靖央の研究がある。葉口は戦時下の少国民向け音楽文化政策の検討で、1940年代以降の児童合唱コンクールが国策に沿う合唱祭だった点を指摘し同大会を具体例とした。植民地をふくむ全国の児童が中継でつなぐ、「進め少国民」ほかの楽曲をラジオにあわせて合唱する事業には強制的な参加がうながされた<sup>13</sup>。浅岡は日本少国民文化協会の内部資料の整理後に同協会の軌跡をまとめ、1942年にさかんだった対外的事業の事例として同大会にふれ、少国民の団結が図られた児童文化政策の一端を紹介した<sup>14</sup>。以上二つの研究からは、ラジオのもつ大衆性、同時性といった特徴が内外の児童をむすびつけ、教育的な働きかけをいっせいに起こすために都合のよかった点が確認される。

ラジオの受信契約者数は1941年12月の太平洋戦争開戦前夜に600万人を突破した。秋山正美の試算をふまえれば、1世帯の家族数を6人として内地人口7,000万人の5割以上が聴取したことになる<sup>15</sup>。となるとラジオは「全国少国民ミンナウタへ大会」のような非日常的行事とは別に、日常的に一度に数十万人、100万人規模の子どもたちが聴けるメディアであったことになり、プロパガンダ<sup>16</sup>としての戦争協力の効果にはみのがせないものがある。また、少国民の錬成に資す番組ならば周囲の大人たちの戦時の修養にも役立ち、国民形成の一翼となったことが考えられる。その可能性をふまえたとき、児童文化としてのラジオの子ども番組による戦争協力の歴史にはさらなる解明がもとめられる。

本研究の構成は、以下のとおりである。第2章では、対象とする二つの史料と分析の視角について述べる。第3章では、史料の一つである月刊テキスト『ラジオ少国民：放送と科学』<sup>17</sup>の1941年5月放送号から1942年5月放送号までに関する分析をおこなう。第4章では、いま一つの史料である1941年7月から1945年7月に放送された可能性のきわめて高い台本8本の分析を試みる。第5章では分析で解明されたことを総括し、あらためて「少国民の時間」による子どもの生活と精神の動員という視点からの考察をおこなう。

## 2. 月刊テキスト『ラジオ少国民：放送と科学』と放送台本

戦時下のお茶の間に流れたラジオ番組「少国民の時間」による戦争協力の内容を探索する本研究は、上述のとおり、番組テキストと放送台本という史料を手がかりに進める。

テキストとは月刊『ラジオ少国民：放送と科学』（以下『ラジオ少国民』）で、1941年5月放送号から1942年5月放送号までの全13冊の現存が確認された。戦前のラジオの子ども番組に関する研究の基本図書には、秋山正美編著『ラジオが語る子どもたちの昭和史』全3巻（大空社、1992年）があげられる。同書はおもに『ラジオ少国民』の前身『子供のテキスト：ラヂオ』の1928年11月刊の創刊号から1941年4月放送号までを原版に、主要頁を抜粋して復刻し、番組を分野ごとに整理して解説を加えた労作である。だが、テキスト名が『ラジオ少国民』になってからの内容は、1941年6月放送号の表紙、1942年4月放送号の目次、他誌からの参考楽譜の流用はあるが、それ以外の記事の復刻はない<sup>18</sup>。あとがきには、「昭和のはじめから敗戦までの子供たちの生活がどんなにみじめであり、どれほど多くの子供たちが戦争の犠牲となったかについて書かれた昭和史の本」への辟易が表明されている<sup>19</sup>。したがって、戦時色が濃くなってからの内容を避ける意図が働いた可能性がある。本研究では、秋山がほとんど検討しなかった『ラジオ少国民』を分析する。このテキスト調査では、放送日と番組名がわかるプログラムが掲載された目次を中心にみていく。分析にあたり、発刊時期の特性から、テキスト名が『ラジオ少国民』にあらためられる前後、1941年12月の太平洋戦争開戦の前後という二つの契機に注目する。

放送台本については、1941年7月から1945年7月に放送された可能性がきわめて高い8本がNHK放送博物館で確認された。放送の年月は1941年7、10月、1944年10、11月、1945年3、4、6、7月である。国民学校放送時代の初期とアジア・太平洋戦争最後の年の作品にわかれるため、経時的变化を追うには限界がある。しかし、戦時下に制作され、いまにのこる希少な台本である点をふまえ、各作品の概要の把握に努めたうえで、子どもたちに国策のどういう面が伝えられたかを実証的に考察していくこととする。

## 3. 月刊テキスト『ラジオ少国民』の変容

### (1) 『ラジオ少国民』の発行状況

テキスト『ラジオ少国民』は前身である『子供のテキスト：ラヂオ』をふくめると、1928年から約13年半にわたり題名、巻号、体裁を変えながら発行された。テキストが対象とする番組「子供の時間」が「少国民の時間」に改名されたのは、先述のとおり1941年4月である。だが、テキスト名が『ラジオ少国民』へ変更されたのは1ヶ月後の1941年5月放送号であった。テキスト発行日は放送前月の4月25日だったため、学校教育の本格的な戦時体制への移行後に編集された号である。ただ注意したいのは、その誌名変更在先立ち、『子供のテキスト：ラヂオ』は1941年1月放送号から『子供のテキスト：ラヂオと科学』と惹句が変更されている点である。この改変がもつ意味については後述する。

前掲の秋山の著書によれば、テキスト『ラジオ少国民』の終刊は時期不明であった。そこでは『ラジオ少国民』の終刊号である1942年5月放送号の調査はおこなわれておらず、今回の調査で同号が確認され終刊号として特定された。同号の最終頁には、「雑誌に使った用紙を節約して、もつとお国で必要とする方へまはさなければならなくなつたため」、1942年6月放送分からの「少国民の時間」、「幼児の時間」<sup>20</sup>の番組情報は親雑誌『放送』に掲載されることになったと案内がある<sup>21</sup>。すでに1941年6月から出版用紙は割当制となり、日本放送協会の複数のラジオ・テキストが総合され10月に『放送』が刊行されていた<sup>22</sup>。

### (2) 『子供のテキスト：ラヂオと科学』から『ラジオ少国民』への移行

以下では既述のとおりテキスト名改称の前後、1941年12月の米英蘭との開戦前後という二つの契機に着目し、テキストにあらわれた番組の変容を検討する。まず、『子供のテキスト：ラヂオと科学』の最終号となる1941年4月放送号（3月25日発行）と『ラジオ少国民：放送と科学』の最初号である1941年5月放送号（4月25日発行）の比較である。1941年4月から学校教育は皇国民の錬成をみざす戦時体制に移行したが、子ども向けラジオ番組

とそのテキストには、どういう変化がもたらされたのだろうか。

4月放送号と5月放送号の目次で放送予定番組を対照させると、前者は23日分、後者は22日分の掲載がある。連続番組が多いため、試みに表1のとおり左側に4月に放送された連続番組を日付順に並べ、対応する5月の番組を右側に整理した。連続物以外の番組は、4月分では「合唱附管弦楽 タンホイザー行進曲」、「唱歌連曲 国の御柱」、「童話劇 グスコブドリの伝記」、「対話 この頃の発明と工夫」、「国史劇 国友藤兵衛」、「座談会 これからどんなものが発見されるか」、「連続劇 ドリトル博士・船の旅（1）（2）」、5月分では「お話 七爺八爺」、「お話 金太郎」、「お話と歌 太平洋」、「物語劇 オーロラの下に」、「児童劇 日本海大海戦」、「物語 戦場の約束」である。表1の連続番組にもそれ以外の番組にも、番組名変更にとまなう特徴的な変容はみられない。

表1 「子供の時間」から「少国民の時間」移行時の連続番組の対照

『子供のテキスト：ラヂオと科学』 1941年4月放送号より			『ラジオ少国民：放送と科学』 1941年5月放送号より		
1日（火）	童話劇	4月の翼賛一家	1日（木）	童話劇	5月の翼賛一家
5日（土）	対話	4月の科学	6日（火）	お話	5月の科学
6日（日）	童話劇	北京語アソビ	7日（水）	お話	北京語アソビ
10日（木）	ヴァラエティ	無線の進歩	8日（木）	お話	グライダーの作り方
13日（日）	童話劇	こども回覧板	4日（日）	連続童話劇	こども回覧板
15日（火）	科学こどもの旅	東北地方の巻	19日（月）	科学コドモの旅	山陽地方の巻
19日（土）	お話	なぜなぜ問答	22日（木）	お話	なぜなぜ問答
20日（日）	物語	蜜蜂マアヤの冒険	20日（火）	物語	蜜蜂マアヤの冒険（2）
21日（月）	科学偉人伝	ラヴオアジエ	14日（水）	科学偉人伝	ルンフォード
23日（水）	耳の訓練	発音について	10日（土）	耳の訓練	音の高低
25日（金）	連続劇	僕の研究日記	29日（木）	僕らの研究日記	山に登つて
27日（日）	音楽	よい音楽をき、ませう	25日（日）	よい音楽をき、ませう	ピアノ協奏曲（モツァルト曲）
27日（日）	中国の名作から	孫悟空	17日（土）	中国の名作から	劉備と曹操（1）
夜			18日（日）		劉備と曹操（2）
28日（月）	南太平洋の国々	セレベス・ボルネオ	15日（木）	南方の国々	ジャワ（蘭印）
29日（火）	連続劇	日の丸三人組	11日（日）	連続劇	日の丸三人組（5）

注：日本放送協会編「目次」『子供のテキスト：ラヂオと科学』2(4)、日本放送出版協会、1941年、ノンブルなし、同「目次」『ラジオ少国民：放送と科学』2(5)、日本放送出版協会、1941年、ノンブルなしをもとに筆者作成

その背景には、番組がすでに1941年1月から政府の新体制に即応していた状況がある。制作にあたり、「従来の単なる娯楽慰安を目的とした放送プロの中に次代の児童たちを安住させることなく、次代の児童への健全な文化財を提供」すべく「指導精神」によるプログラムの刷新が図られたという。児童文化の意義が意識され児童の生活技術の解決方法の実施として、大東亜建設に必要な基礎づくりをめざす政府の三大要項「1）建国精神の昂揚、2）功利的自我観念の排撃、3）科学精神の涵養」に沿う番組が企画された<sup>23</sup>。連続番組の多くは、すでに1941年1月から開始されていたのである。先述したテキスト誌名に添えられた「ラヂオと科学」という惹句は、「科学精神」を前面に打ちだした表現であった。

あらためて表1をみると、「4（5）月の科学」、「科学こどもの旅」、「科学偉人伝」、「研究日記」など「3）科学精神の涵養」に沿う番組の多さがわかる。テキスト名『ラジオ少国民』に「放送と科学」と惹句が添えられたとおり、科学を重視する制作姿勢の証左である。また、政府の要項との照応ではないが、放送局の制作意図にある、児童文化の意義がみとめられる番組には複数の童話劇、物語、音楽、中国の名作があり、生活技術に関連する番組には「翼賛一家」、「耳の訓練」がある。「北京語アソビ」や南方の国に題材をとった番組は、大東亜への意識を高める番組であろう。新体制に即応するプログラム編成が1941年4月の国民学校制度の実施に先立ち、学校放送枠でない教養番組枠ですすでに同年1月から展開されていた点には大いに注目される<sup>24</sup>。新しい学校制度

をみこした番組をとし校外生活での少国民錬成に役立つとする放送局の取り組みは、国策への積極的な協力をしめす。学校から帰宅した夕方のひととき、子どもたちの娯楽・慰安として期待されていた番組は戦時下の教育が強く意識された内容へ置きかえられていった。ここから、戦時下のラジオが子どもたちの自由時間を動員する方向へ進んだと判断される。

### (3) 太平洋戦争開戦をはさんだ番組制作状況の変化

次に、1941年12月8日の太平洋戦争開戦をはさんだ「少国民の時間」の変容について、テキスト『ラジオ少国民』を手がかりに分析していく。

ところで、12月8日の米英蘭との開戦日の放送については、「少国民の時間」に関連して興味深い論点がある。帝国陸海軍が朝6時に戦闘状態に入った事実は午前7時の臨時ニュースで流され、国民はその日1日、ラジオが伝える大本営発表にくぎづけとなった。午後6時から情報局の第二部第三課長・宮本吉夫が「政府は放送によりまして、国民のかたがたに対し、国家の赴くところ、国民の進むべきところをハッキリお伝えします。どうぞラジオの前にお集まりください」と呼びかけた<sup>25</sup>。従来なら、時報につづくこの時間帯は「少国民の時間」だった。『NHK確定番組』によると、この日のプログラムは谷屋充作の偉人伝「西郷隆盛」が予定されていた。同日に実際放送された番組については、『放送五十年史』に情報局編『大東亜戦争放送しるべ』<sup>26</sup>ほかの史料を利用して復元された一覧が記載されている。それによると、宮本の告知のあとは「少国民のシンブン」とレコード音楽であった<sup>27</sup>。情報局のスポークスマンが利用した「少国民の時間」の時間帯は、秋から春にかけては日没後である。12月8日から灯火管制に入ったこともあり、国民の多くは帰宅して配給品でつくられた食事を家族と分けあい、ラジオに耳を傾けたと考えられる。情報局が国からの通達にふさわしい時間帯と判断したのであれば、以後の「少国民の時間」の放送内容には、国民全体への教育効果や行動効果が大きいと期待されたことだろう。

話を、12月8日をはさんだ「少国民の時間」の変容の分析にもどす。テキスト『ラジオ少国民』の1941年12月放送号までは、「1 月 対話 僕等は今年何をしたか 横浜市青木国民学校大地道場」、「8 月 お話 水と温度 理博 朝比奈貞一」、「10 水 ラジオ見学 炭焼小屋 仙台児童劇協会」といった具合に目次に掲載されたプログラムには日付があり、内容、題名、出演者などが列記され、ほぼ毎日の放送予定が一覧できた<sup>28</sup>。加えて、約半分の番組が本文に記事で紹介され、愛読者に放送への期待をかき立てる工夫がされていた。しかし、1942年1月放送号からはプログラムに日付の記載がなくなった。2月放送号の投稿欄「愛読者放送室」には、それを問う投書が寄せられ、担当記者が「戦争中はいつどんな大切なニュースを放送しないとも限りませんし、また、いろいろのことで、はじめから放送日をきめることが出来ないのです」と応じた<sup>29</sup>。臨時放送による番組変更が日常的となり、音楽レコードをかける以外は生放送がほとんどの状況で本番の予定を立てにくく、テキストの制作に苦心する様子が見えがえる。

1942年2月放送号の目次からは放送予定が10本前後、記載されるのみとなった。そこからは下表2のとおり出演者から団体名が消え、詩人や童話作家、口演童話家や専門分野の有識者など一人だけの記載となった。表2の

表2 『ラジオ少国民：放送と科学』1942年2月放送号「目次」掲載の放送予定内容

少国民詩	アジヤのうぶごゑ	与田 準一
少国民詩	あらわしありがたう	武田 雪夫
日本物語	国の始め	久留島武彦
お話	友情に薫る菊の花	道明真治郎
お話	御稜威になびく民	高橋 一男
お話	印度象の話	須川 邦彦
お話	武芸十八般	古賀 残星
お話	低温の科学	江見 節男
お話	日本の陸・海・空軍	大村 章

注：日本放送協会編「目次」『ラジオ少国民：放送と科学』3(2)、日本放送出版協会、1942年、ノンブルなしをもとに筆者作成

プログラム案内からは、提供できる番組の表現形式が詩やお話など限りあるものになった点がわかる。出演者一人に依頼して番組をつくれれば手間はかからない。放送予定が変わっても再調整がしやすかったことだろう。だが、『NHK確定番組』で放送結果を追うと、開戦後の番組は表2から看取されるほど限定的ではない。同データベースから抜きだした1942年2月前半の番組記録が表3である。

表2と表3をくらべたとき、1) 予定にある種別は「少国民詩」と「日本物語」、「お話」のみだが、番組記録には唱歌・少国民軍歌の合唱、綴方などもある、2) 合唱や綴方に児童の参加がある、3) 名古屋、大阪からの中継がある、4) 軍人の話ほか多くが戦意を鼓舞する内容、東亜共栄圏・日本の国体を考えさせる内容で戦時色が濃いという4点が把握される。

先述の政府の要項「1) 建国精神の昂揚、2) 功利的自我観念の排撃、3) 科学精神の涵養」に沿う番組は表2でも確認されるが、表3から放送局は多様でありきられることのない番組制作に努めていたといえる。また表3により、開戦まもない1942年2月には「少国民の時間」によって大東亜建設の要項に沿うプロパガンダが着実にこなわれていたとわかる。

表3 『NHK確定番組』に記録された1942年2月前半の「少国民の時間」

放送日	種別 ( )内は中継局	番組名・番組内容	出演者ほか
2月1日(日)		前線の空を飛んで	斉藤寅郎
2月2日(月)	(名古屋)	東亜共栄圏の動物	北王英一
2月3日(火)		爆音	田口泖三郎
2月4日(水)	殊勲物語	□□三人の勇士 国美□□	石井□一
2月5日(木)		南の国のお友達	粟津勸縁
2月6日(金)	日満児童交□放送	おめでたう萬寿節	
2月7日(土)		大東亜戦はこれからだ	陸軍少将 大場□平
2月8日(日)		われらの奉戴日 一、唱歌「われらの奉戴日」 一、綴方朗読 一、唱歌「ハワイ海戦の歌」「進め少国民」	国民学校児童
2月9日(月)	日本物語(大阪)	神武天皇御即位 日本の軍人は何故強い(録音)	久留島武彦 加藤大将
2月10日(火)		南方の音楽	
2月11日(水)	お話と唱歌	輝やく紀元節 「紀元節」 伸びゆく日本	東京本郷国民学校児童 伯爵 二荒芳徳
2月12日(木)		御稜威になびく民	高橋一男
2月13日(金)	少国民軍歌	進め少国民	指導 藤井典明
2月14日(土)		闘ふ少年工	小原忠 他
2月15日(日)		低温の科学	江見節男

注：□は判読不明。

表2の予定と一致する項目を太字でしめた。

#### 4. のこされた「少国民の時間」台本の検討

##### (1) 台本の概要

本章では、二つめの史料である台本8本の調査結果を述べる。概要は制作年ごとに以下に整理した。日付は放送日で、いずれも『NHK確定番組』で放送記録を確認済みである。

## 1941年制作分

## ① 7月30日(水)「音の聞き分け方」

表紙裏にペンで作曲家の弘田龍太郎、佃島国民学校児童、(唱歌)葛飾国民学校児童の出演が記載された、タイプ文字による謄写版印刷の台本。ただし『NHK確定番組』には、(作並指導)弘田龍太郎、豊島国民学校児童、葛飾国民学校児童と記録あり。

国民学校の芸能科音楽教科書『ウタノホン 上』<sup>30</sup>より「ユフヤケコヤケ」、「うたのほん 下」より「たなばたさま」、青年団用ラッパ鼓隊行進曲、シューマン「楽しき農夫」、ガブリエル・マリー「金婚式」、新訂4年「雲」といった楽曲、「入口の出入、雷と雨(夕立)、お寺の鐘」といった擬音の指示が1-2頁にあり、以下、劇形式で読本朗読、ピアノを用いた聴音クイズ、国防上役立つ音の聞き分けに関する解説などが展開される。

## ② 10月24日(金)「馬市が来て」

真船豊原作、阿木翁助脚色と台本表紙、文学座、戌井市郎演出と『NHK確定番組』に記載あり。台本はタイプ文字の謄写版印刷。

馬を飼育する一家と馬市で村を訪れた博労との交流をえがく劇形式の放送童話。翌日に売られる馬について、少年と妹はかわいそうだから先にしてほしいと父にたのむが、博労がセリではきつと軍馬御用になるという。「軍馬」と聞いて子どもたちは喜ぶ。少年は父に、母手製の腹かけをした馬の出来ばえを村人たちに披露するよういわれ馬にのって出かけると、はね落とされて仔馬も土手からころがり落ちる。だが、馬はかすり傷一つ負わずにもどったため、博労は軍馬にもってこいだという。翌朝、父が馬市へ出かけていく。「愛馬行進曲」の合唱、蹄の音、馬の鈴の音でむすばれる。

## 1944年制作分

## ③ 10月7日(土)「北斗南十字」

穂積純太郎作。人物一覧に「先生・兵隊」、「寮母・看護婦」が同一人物と指定、ほかに啓ちゃん、満里子ちゃんとあり。タイプ文字の謄写版印刷で製作された台本。

ファンタジー仕立ての劇。啓と満里子は栗ひろいに出かけた疎開児童の集団からぬけだし、啓の模型飛行機をまじないで大きくして飛び立つ。南の島まで行き、目にした日の丸に喜び、病院船に降下して寮母そっくりの看護婦と話す。つづいて雪の降る戦地へおもむき、日本兵に慰問の栗をわたそうとする。その兵士の顔が先生とわかり、啓はねほけて起きる。おとなしく眠る満里子の横で啓が飛行機の話をする、ぐっすり眠れといわれる。

## ④ 11月6日(月)「椎の実と太鼓」

堀江林之助作。表紙裏に「出て来る人」として正作君、隣の小父さん、隣の小母さんとあり、ペンで内村軍一他と記載がある。タイプ文字の謄写版印刷で製作された台本。

隣家の椎の木にひっかけた模型飛行機を取りにきた正作少年と隣人たちの交流で展開する劇形式の放送童話。正作は、椎の実が落ちる下に置かれた太鼓のひびきがよいことに感心する。その古太鼓は、胴に「慶応3年8月吉日」と書かれた「尊王攘夷太鼓」と呼ばれるものだった。隣の小父さんの祖父が英仏米の連合艦隊が下関を砲撃した事件のうわさを聞き、国を守ろうと太鼓をたたいて村人たちとくり出したが、翌日ひょっこり帰ってきた。黒崎まで行き、3年前の事件だったと知らされたのだ。

## 1945年制作分

## ⑤ 3月23日(金)「連続放送劇 富士の子たち(一)」

『NHK確定番組』には題名「開墾少年隊」と記録がある。台本に福田清人作、宮津博脚色、『NHK確定番組』に劇団東童と海軍軍楽隊出演の記載あり。10枚半のタイプ文字による謄写版印刷のあとに、7枚の手書きによる謄写版印刷の「第2回」台本が綴じられている。第2回の放送日は、『NHK確定番組』によると3月26日(月)である。

満蒙開拓青少年義勇軍の「富士小隊」を先輩にもつ「富士少年隊」のきびしい開墾の課題と、それに屈しない労働ぶり、疎開児童との交流がえがかれた劇形式の放送童話。

## ⑥ 4月8日(日)「少国民総進軍」

台本で宮津博作、『NHK確定番組』で劇団東童の出演が確認される。台本の4枚めまでがタイプ文字による謄写版印刷、そのあと8枚めまでが手書きによる謄写版印刷で「終わり」と記載がある。9枚めから12枚めに「そ

の4」がある。「その1」から「その5」が物語として展開し、「その6」に「少国民進軍歌」の歌詞がある。「その4」はあとから書き起こされた部分と判断される。

大詔奉戴日<sup>31</sup>にちなみ、1941年12月8日の交戦状態に入った日からの少国民の艇身の軌跡をたどる劇。開戦日、先生に少国民の決意を問われた仲間たちが、航空機工場の工具、潜水艦の水兵、農夫、少年飛行兵などとして活躍する様子が激しい表現でえがかれる。

⑦ 6月21日(木)「牛と少年」

堀江林之助作、小島洋々ほか出演。「出て来る人」として一郎君、お祖父さんの記載があり、牛の声、まぐさ切りが擬音に指定されている。タイプ文字の謄写版印刷の台本。

東京から疎開してきた少年と祖父の会話劇。話題は、学校の一期生だった祖父たちが卒業記念に植えた柏の木、教室の天井にのこる足あと、すもうやけんかが強いのはどの家の子かといったこと。少年は牛の世話をして過ごし、特攻隊をめざしている。

⑧ 7月8日(日)「鋼の中の少女」

玉井勇作、間島三樹夫脚色。タイプ文字の謄写版印刷の台本。表紙裏の人物一覧に森田のぶ、森田三郎(のぶの弟で工具)、職長牧野、小畑量平(工具)、詞と記載あり。

製鋼工場で石炭瓦斯の分析をする少女と溶鉱炉のそばで働く弟の話。工員たちのけがが絶えないきびしい職場で、二人は大けがをした小父さん(小畑)と親しく話す。工業学校の受験がみとめられない徴用工の身分になやむ弟の話聞いてもらい、のぶと小畑はいっしょに職場の運動会の各部対抗パン食い競争に参加する。

## (2) 台本にみられる戦争協力の表現

ここまでの概要の把握により、国防、軍馬、疎開、尊王攘夷、満蒙開拓、艇身、特攻隊、徴用と、どの台本にも戦時期ならではの設定やキーワードが確認された。以下では、台本にふくまれる具体的な戦争協力の表現をあげていく。台本からの引用頁は註でなく、引用部分につづけて記載する。

台本①は太平洋戦争開戦前の7月、②は10月の制作である。①では解説者が聴取者に音を聴き分けるけいこをすすめて、「音をよく聴くことは歌つたり、音楽を聴いたりする上に大切なことであると一緒に飛行機や鉄砲の音をよく聴き分けるやうになつて国防上真に役にたつのです」(台本① 11頁)という台詞でむすぶ。②では、馬を飼育する家族の物語をとおり、国の役に立つ仕事に関する指導がなされる。例として「たとへば坊や達だつてさうだろう。6つになれば学校へゆく。21になれば兵隊検査をうける。人間だつて馬だつて皆役にたつやうになればそれぞれの仕事をしなくちやならないものだ」(台本② 4頁)という博労の台詞がある。以上二つの例は、国防や国益を考えさせる内容から、新体制に応じた「指導精神」によるプログラムといえる。

1944年制作の台本③はファンタジーの作風に注目されるが、テーマは戦地の兵隊、従軍看護婦への思いである。栗ひろいの開始時、先生は子どもたちに「今日拾う栗は、ほんの少し食べるだけにしてをいて、あとは全部戦地にゐらつしやる兵隊さん達に送つて上げる事にするんだつたね? さあ分つた者は手をあげて!」(台本③ 2頁)という。満里子は病院船の看護婦に、「私も大きくなつたら小母さんの様な看護婦さんになつて兵隊さんの御病気やおケガを見て上げるの」(台本③ 8頁)と語る。同年制作の台本④は地域の歴史に題材をとったユーモアのある台本で、下関への砲撃に対し「傲慢無礼なる攘夷を攘て! 神州を護れ!」(台本④ 5頁)と昔の村人たちがくり出していく挿話には、放送当時の米英蘭との戦いがかさねられている。この作品では、椎の実で太鼓がひびく「トオン、トントン」という音が字号通信に似ていることからその指導が展開する。既述のとおり1945年4月以降に国民学校放送の休止で教育内容の一部が「少国民の時間」に移されるが、それ以前から字号訓練という教育内容は「少国民の時間」にふくまれていた。

1945年の4作品は親もとでの生活から児童が切りはなされている様子が共通する。台本⑤は富士山麓で開墾に励む子どもたち、⑥はさまざまな場で艇身に取り組む卒業生たち、⑦は疎開先の祖父宅で暮らし、特攻隊で出撃する夢をもつ少年、⑧は徴用先で工員たちと交流しながら成長する姉弟が登場する。いずれも出征や生産活動に親世代がかり出される時局が前提にあり、子どもの生活から遊びや娯楽、慰安が遠ざけられている印象をあたえる。子どもでも国や社会に役立つように身をもって働く大切さ、保護者からの早い自立が望まれることが表現されている。台本⑥、⑦、⑧が国民学校放送の休止以降の番組である。

艇身をとまなう労働、早い自立といった点について、各台本の具体的表現をみってみる。⑤で開墾隊の少年隊長は、一坪でも多く土地を切りひろくため、村で30年間放置されていた岩野原の開拓を決意する。「諸君！ 前線の斬込隊につづく意気で岩野原へ突撃し様ぢやないか！『なせばなる！…』日本男児の気魄を示さうぢやないか！」（台本⑤ 10頁）という呼びかけに、隊員は「隊長やります、突撃します、岩野原に負けるな！ 開墾斬込隊だ！」（台本⑤ 10頁）と応じる。⑥では、教え子の決意を聞いた教師が「君たちのその立派な覚悟こそ、日本少国民の誰もが戦の御詔勅を拝した今日この日、しつかと胸に刻みつけた、尊い尊い誠心なのだ。君たち少国民が祖先より受け継いだ忠勇義烈の魂こそ、日本を絶体不敗に導くものなのだ。……後続く者あり。日本少国民！ 進め日本少国民！」（台本⑥ 4頁）とげきを飛ばす。⑦では頭も体も立派な日本人になるよう祖父にいわれた少年が、今に特攻隊で出撃すると語り、「『〇〇村出身の若桜一郎君は「ワレ テキクウボニ トツニウス」と云ふ無電を永遠の別れとして皇国護持の大義のもと華々しくも雄々しく散つて行つた』さういつてラジオの報道で聞かせますよ」（台本⑦ 8頁）と語る。⑧は製銅工場を舞台に、まちがいの許されない仕事に取り組む姉、夏でも1600℃の炉前で力仕事をする弟を中心に徴用がえがかれる。大けがから復帰した小父さんは義足が便利と笑い、職長に「あんたといふ人は、一体どういふ人なんだらう、どんなひどい目にあつても、明るい顔をしてるが……」と声をかけられ、「さうひやかしなさんなよ、これは生れつきの顔で仕方ないですわい」（台本⑧ 6頁）と答える。台本⑤と⑥では、たたみかけるように戦意を鼓舞する激しい勢いの表現がくり返される。⑦と⑧はユーモアを取りこんだ穏やかな作風の物語だが、特攻隊でみずからの命が失われる瞬間が想像されていたり、体にダメージを受けても明るくふるまう気質が語られていたりする。表現の印象に差はあるが、⑤、⑥でも⑦、⑧でも、強調されるのは国民一人ひとりの国家のための艇身なのである。

「少国民の時間」の前期にあたる1941年の台本では、親もとで暮らし学校に通う子どもたちの日常が基本であったが、後期にあたる1944-1945年の台本では疎開先や生産現場で奮闘する姿がえがかれ、放送が流れる環境が家庭のお茶の間という設定でなくなった点がうかがえる。大人同様に生活と精神が動員された子どもたちが寝所にもどり、自分と同じく国のために働く仲間を想像しながらラジオを聴くことが想定されていたととらえられる。

## 5. おわりに

本研究では、戦時下に課外読本的な役割が期待された子ども向け教養番組「少国民の時間」の制作の方向性と具体的内容を、番組テキストと台本という二つの史料から検討してきた。番組全体を通時的に網羅する史料ではないため、1941年4月から1945年8月にいたる変遷は限られた範囲の把握にとどまった。しかし、対象とした史料と番組について明らかになった点が複数あり番組の輪郭がみえてきた。それらを以下に整理する。

第一に、1941年5月放送号より『子供のテキスト：ラジオと科学』から『ラジオ少国民：放送と科学』に改題されたテキストは、すでに1941年1月放送分の番組から4月の教育の本格的な戦時体制化をみこし、「1）建国精神の昂揚、2）功利的自我観念の排撃、3）科学精神の涵養」という政府の要項に沿う内容に切りかわったことを実証するものだった。とりわけ、「科学精神の涵養」に資す企画の充実が確認された。新体制に即応するプログラム編成が、学校放送という教育枠ではなく教養番組枠で1941年1月から展開された点は特筆にあたいする。校外生活での少国民錬成、すなわち「課外」に資す番組制作の姿勢は積極的な国策への協力であり、校外生活における「少国民の心性の陶冶、情操の涵養、性格の形成」<sup>32</sup>への協力をうたって1941年12月に創立された日本少国民文化協会に先んじる組織的な動きである。そこには、子どもの自由時間の動員ともいえる状況がみとめられた。

次に解明された点は、番組「少国民の時間」のテキスト『ラジオ少国民』の終刊時期である。同誌は1942年5月放送号をもって終刊となり、6月からの番組は親雑誌『放送』に掲載されるようになった。それ以前、太平洋戦争開戦後の1942年1月放送号からテキストには番組の放送予定日が掲載されなくなり、番組テキストはその機能の一部を失った。とはいえ、番組のほうは開戦後もテキストで確認された限定的な内容にとどまることなく多様な表現で提供しつづけられ、あきらめないプロパガンダが工夫された。

第三にあげられる点は、「少国民の時間」の前半期にはみられなかった子どもの生活環境の設定が番組内でおこなわれていた点である。前半期2本、後半期6本という限られた事例による分析結果だが、家庭と学校を基本

にした生活から、疎開先や生産活動への動員先での生活をえがく設定の台本が多くなる傾向が把握された。遊びや娯楽・慰安のある生活から、生活時間と精神を総力戦に捧げるようにもとめられる状況への移行が想定されていたと考えられる。積極的な総力戦への貢献が子どもたちにもとめられたとき、そこにはもはや「正課」と「課外」の別はなくなっていたと理解される。

本研究では、教育の戦時体制下での子どもの動員がラジオの教養番組枠ではどうとらえられていたかの把握に努めた。今後は、国民学校放送枠における番組を対象とし、子どもの生活のとらえかたにどのような変容があったかの検討をおこなう必要がある。

## 【註】

1. 民放の嚆矢は、1951年9月1日6時30分からの中部日本放送（JOAR）、同日正午からの大阪の新日本放送（JOOR）の放送開始である。前者では、番組提供はあったがCMはなかった。後者では、スモカ菌磨の60秒スポットCMが流された（日本放送協会編『放送五十年史』日本放送出版協会、1977年、317頁）。
2. 『NHK確定番組』のもとには1960年以降作成といわれる小冊子（宮川大介「放送草創期の番組表を読み解く（1）何が記録されているか」NHK放送文化研究所編『放送研究と調査』66(11)、NHK出版、2016年、77頁）。仮放送中の子ども向けとわかる番組記録には3月26日の村山久子の童謡独唱、3月31日の宝塚少女歌劇団2人の斉唱、4月11日夜間の番組枠で巖谷小波のお伽講演「水地獄」、6月10日夜に横田桃水の童話「一番りこうな猿と一番馬鹿な兎」、6月21日夜に安部季雄のお伽噺「総理大臣の涙」と童謡4曲など。
3. 20世紀前半の日本における児童文化のリーダーの一人で、1960年までに200回近いラジオ出演をはたした。久留島の出演記録は、大分県立先哲史料館編『久留島武彦 著作目録・口演活動記録（大分県先哲叢書久留島武彦評伝別冊）』大分県教育委員会、2004年、92-101頁に整理されている。
4. 『NHK確定番組』で確認。秋山正美はこれを番組名ではなくサブ・タイトルととらえ、定時番組としての「子供の時間」の開始は1926年9月のJOAKの番組全面改正以後、夜6時からに定着してからのこととする（秋山正美編著『ラジオが語る子どもたちの昭和史Ⅰ』大空社、1992年、3-4頁）。だが、『NHK確定番組』で7月12日以降をみると、いずれも午後2時台に7月13日「子供の時間 童謡」、7月16日「子供の時間 童謡（筆者註：「童謡」と思われる）岸辺福雄」、7月18日「子供の時間 童謡 阿部季雄（筆者註：「安部季雄」と思われる）」といった記録が散見される。一般向けとは異なる子ども対象の番組であることが、制作者に確実に意識されていた点はおさえておきたい。なお、大阪放送局（JOBK）の「子供の時間」研究で知られる畠山兆子は、JOBKでの番組名「子供の時間」確立を大津裕司の説を引き1925年9月15日と述べ、「子供の時間は大阪」といわれた、JOAKをしのぐ発展への契機を1926年1月の奥屋熊郎の入局としている。1926年4月15日、奥野が足立勤（1898-1945）を「子供の時間」専任として入局させた（畠山兆子「JOBK『子供の時間』の研究—足立勤の入局と新企画—」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』34、2021年、1-3頁）。足立はJOBKの「子供の時間」担当者の立場を活用し、関西の児童文化の諸分野のリーダー、プロモーター、アドバイザーとして活躍した人物である（富田博之『日本児童演劇史』東京書籍、1976年、242頁）。
5. 1933年はJOBKによる学校放送の開始で、全国向けの学校放送開始は1935年4月15日（土屋礼子編『日本メディア史年表』吉川弘文館、2018年、122・126頁）。放送や子ども番組の歴史については、前掲日本放送協会編『放送五十年史』、前掲秋山編著『ラジオが語る子どもたちの昭和史Ⅰ』などを参照した。
6. 竹山昭子『史料が語る太平洋戦争下の放送』世界思想社、2005年、同『太平洋戦争下 その時ラジオは』朝日新聞出版、2013年、貴志俊彦・川島真・孫安石編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、2015年、井川充雄『帝国をつなぐ〈声〉——日本植民地時代の台湾ラジオ』ミネルヴァ書房、2022年などが代表的。
7. 1941年4月1日時点での放送時間は、『NHK確定番組』によって午後6時25分から「東京及近県の時間」が確認されるため、「少国民の時間」が20分間と「少国民の新聞」が5分間だったと考えられる。その後、放送時間には変動の生じた様子がみられる。太平洋戦争開戦後には「少国民の新聞」が先で「少国民の時間」はあとの放送になり、次の番組開始が午後6時30分となった。1944年以降、次の番組のはじまりが午後6時25分、6時40分、6時45分、9時などいろいろある。

「少国民」という表現に関し、1941年12月の「日本少国民文化協会」創立にいたる動きをみておく。同協会は設立趣意書に、国民学校外の生活における「少国民の心性の陶冶、情操の涵養、性格の形成」への協力をうたった（社団法人日本少国民文化協会「設立趣意書・定款並諸規程」滑川道夫監修『少国民文化 第8巻「資料編」（社団法人日本少国民文化協会関係資料）』エムティ出版、1991年復刻（初版年不明）、2頁）。

浅岡靖央によれば「少国民文化」は「児童文化」のいいかえで、児童文化ということばは1930年代から識者たちに用いられるようになった。そこには、子どもたちへの悪影響が懸念されるメディアやキャラクターへの認識と「その影響力を活用して、子どもを大人の期待する人間に育てていこうとする教育運動」につながるものがあり、児童文化は1940年の新体制運動に連動していく。1941年12月には戦時統制として、あらゆる児童文化財は日本少国民文化協会に一元化される（浅岡靖央『子どもの文化環境と『児童文化』』川勝泰介編著『よくわかる児童文化』ミネルヴァ書房、2020年、31頁、同『「児童文化」から『少国民文化』へ』川勝泰介編著『よくわかる児童文化』ミ

- ネルヴァ書房、2020年、32-33頁)。文化を介して子どもの動員を図る人材育成の組織が画策される児童文化の流れに、番組「少国民の時間」の改称も沿っていたといえよう。
8. 日本放送協会編『昭和16年 ラヂオ年鑑』日本放送出版協会・日本放送出版協会関西支社・日本放送出版協会中部支社・日本放送出版協会九州支社、1940年、126頁
  9. 日本放送協会編『昭和22年 ラヂオ年鑑』日本放送出版協会、1947年、40頁
  10. 鈴木博「太平洋戦争と学校放送」日本放送協会編『学校放送25年の歩み』日本放送教育協会、1960年、121-122頁
  11. 前掲日本放送協会編『昭和22年 ラヂオ年鑑』、40頁
  12. 中村美和子「国民学校放送における国史劇の活用—一人気劇作家を起用した「国民科国史」の番組制作—」『メディア史研究』50、2021年、100-130頁
  13. 葉口英子「戦時下における子どもの歌—少国民文化と音楽」『静岡産業大学情報学部研究紀要』11、2009年、218-219頁
  14. 浅岡靖央「解説『日本少国民文化協会』の軌跡」浅岡靖央編・解題『『日本少国民文化協会』資料集大成 別冊「日本少国民文化協会」解題・索引・年表』金沢文圃閣、2021年、30頁
  15. 前掲秋山『ラジオが語る子どもたちの昭和史 I』、7頁
  16. 定義として「世論へと働きかける際に使われる一連の技術であるため、一般大衆の社会心理に影響を及ぼす」(バラク・クシュナー／井形彬訳『思想戦 大日本帝国のプロパガンダ』明石書店、2016年、33頁)、「特定の目的をもって個人あるいは集団の態度と思考に影響を与え、意図した方向に行動を誘う説得コミュニケーション活動の総称」(佐藤卓己『現代メディア史 新版』岩波書店、2018年、117頁)
  17. 「ラヂオ」という表記は1941年4月から「ラジオ」にあらためられ、1941年3月25日発行『子供のテキスト：ラヂオと科学』4月放送号は4月25日発行『ラジオ少国民：放送と科学』5月放送号となっている。
  18. 放送された歌の楽譜は、秋山正美編著『ラジオが語る子どもたちの昭和史 III』大空社、1992年に所収。
  19. 秋山正美「終わりに編著者から」『ラジオが語る子どもたちの昭和史 II』大空社、1992年、575頁
  20. 1935年に全国向け学校放送がはじまった際、「小学生の時間」、「教師の時間」とともにその一部を構成した。西本三十二によれば、それに先立つ1933年2月、大阪放送局(JOBK)ですでに毎週土曜日の午前中に10分間、音楽とお話をくみあわせて試験的に放送されており、「世界いずれの放送局でも未開拓の分野」であった(西本三十二「学校放送の創始」日本放送協会編『学校放送25年の歩み』日本放送教育協会、1960年、31頁)。その後、1939年6月に「幼児の時間」は学校放送枠から分離され(日本放送協会編「目次」『子供のテキスト：ラヂオ』12(5)、日本放送出版協会、1939年、ノンブルなし、同「目次」『子供のテキスト：ラヂオ』12(6)、日本放送出版協会、1939年、ノンブルなしにて確認)、広範な聴取者層を対象としていた教養番組「子供の時間」の幼児層と初等科1、2年生を引きうけることになった。
  21. 日本放送協会編『ラジオ少国民：放送と科学』3(5)、日本放送出版協会、1942年、80頁
  22. 前掲竹山『太平洋戦争下 その時ラジオは』、157-158頁
  23. 日本放送協会編『昭和17年 ラヂオ年鑑』日本放送出版協会・日本放送出版協会関西支社・日本放送出版協会中部支社・日本放送出版協会九州支社、1941年、124頁
  24. 「子供の時間」で「科学精神の涵養」が強く意識された番組には1941年1月に先がけ、1940年12月16日(月)から22日(日)に連続7日間の特集番組として組まれた「皆さんの科学週間」がある。第1日の16日には橋田邦彦文部大臣が「科学する心」という講話をおこなった。週間中には、「をぢさんとをばさんの話」として工学博士と作家の野上彌生子の対話、劇団東童によるガリレオの童話劇、「科学の進歩」をテーマとした東京高等師範附属小学校児童参加の座談会などがある。以上は、『NHK確定番組』の調査による。
  25. 前掲日本放送協会編『放送五十年史』、140-142頁
  26. この史料を分析した竹山昭子によれば、太平洋戦争期に情報局が放送業務にかかわる部署へ向けて毎月作成した冊子で、「放送の基本方策」、「輿論指導方針」、「情報宣伝方策」、要人のラジオ講演の採録などが掲載されていた(前掲竹山『史料が語る太平洋戦争下の放送』、9頁)。
  27. 前掲日本放送協会編『放送五十年史』、142頁
  28. 日本放送協会編「目次」『ラジオ少国民：放送と科学』2(12)、日本放送出版協会、1941年、ノンブルなし
  29. 日本放送協会編「愛読者放送室」『ラジオ少国民：放送と科学』3(2)、日本放送出版協会、1942年、80頁
  30. 上巻は『ウタノホン』、下巻は『うたのほん』と表記され、ともに1941年に刊行された(文部省『ウタノホン 上』文部省、1941年、同『うたのほん 下』文部省、1941年)。
  31. 従来興亜奉公日(毎月1日)にかわり1942年1月から宣戦の詔勅発布の日として毎月8日と定められ、戦争必勝の国民志気昂揚を大政翼賛会が中枢となって図った。開戦の詔勅奉読式、寺社での必勝祈願、国旗掲揚ほかが義務となり、午後7時40分からの隣組常会ではラジオで戦争完遂目的が聴取された(由井正臣「大詔奉戴日」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第8巻』吉川弘文館、1987年、779-780頁)。
  32. 註7を参照のこと。

**【謝辞】**

調査に際しNHK放送博物館、日本近代文学館、大阪府立中央図書館国際児童文学館に大変お世話になりました。また、本研究の遂行には前川財団より2021年度研究助成を受けました。皆様に深く御礼申し上げます。